篠山紀信
インタビュー

人間に突き付けられた不条理

3月11日に起こった出来事は、生きることの価値観を根本から変えるだろう。昨日まで平凡な日常を送っていたのが突如一変し、生と死があっという間に転換する不条理。それが小説や映画でなく、現実に人間に突き付けられたのだから。

被災地から届けられる写真は、日を追うごとに様相が変わった。震災直後の生々しいもの。驚天動地というか驚愕（きょうがく）するようなもの。悲しみを込めたもの。復興する人間の力強さ。昨日までがれきでいっぱいだったところに道ができていく驚き…。

僕はものをつくる人間として、もっと深いところで人間に突き付けられた不条理とは何かを冷静に受け止め、現場と向き合って自分なりに表現したいと思っていた。

日経コンストラクションから「現場紀信」で東日本大震災を撮らないかという話を持ちかけられたときはたいへんうれしく、二つ返事で引き受けた。「現場紀信」の写真はすべて、僕の感覚と目で切り取る。「現場紀信」であれば撮れると思った。

とにかく被災地に行ってみることが重要だった。東京でこういうものを撮ろうと事前に考えて、被災地でそれに合った写真を撮るのは不遜な行為だ。

震災の発生から50日後に行った被災地は、不思議なほどに静かだった。被災地のあまりの大きさゆえに、被災したままの状態が広がるという理由もあるが、それだけではない。ぶしつけにも突然取材し、撮影させてもらっているのに、被災者は丁寧で冷静に話をしてくれた。ある種の達観なのか諦めなのか、その静けさと落ち着きのなかから、震災で受けた傷や悲しみの大きさがひしひしと伝わってきた。

3月11日以前と以後では、表現の在り方が変わると思う。表現者としての僕は価値観が変わり、作品が変わる予感がする。でも1回行っただけで僕の表現がどう変わるとか軽々に結論付けたくない。被災地には複数回行くことになるだろう。日がたつごとにものの見方は変わるはずだ。震災の現実と対峙し、最終的な作品として答えを示したい。（談）

（聞き手は本誌編集長、畠中 克弘）

宮城県名取市閖上。道路からはがれきが撤去され、静けさが漂う

宮城県南三陸町志津川。立ち並ぶ電柱が復旧の始まりを印象付ける

南三陸町志津川。内陸側から山あいの道を抜けると突然、がれきが

南三陸町志津川。被災した建物は漁業設備が絡まったままだった

南三陸町志津川。重機によるがれきの撤去作業が黙々と続く

仙台市宮城野区蒲生。海岸公園内の災害廃棄物仮置き場

南三陸町志津川。防潮堤が崩壊し、水門は大破していた

名取市閖上。被災した魚市場の建物から見た市街地の被害

名取市閖上。魚市場のコンクリート構造物に残る津波の爪痕

宮城県石巻市中瀬。5月2日とあって、こいのぼりが翻っていた

石巻市中瀬。被災した家屋のカーテンが強風でなびいていた

仙台空港。4月13日に民間機の発着が再開された。手前は進入灯

仙台市若林区荒浜。津波で防潮林がなぎ倒され、地盤は洗掘された

仙台空港付近の海岸。3月11日とは違い、この日の海は静かだった

仙台市若林区荒浜。仮舗装して被災車両の仮置き場にする荒浜小学校

GE NBA 8

東日本大震災

2011年5月1日～3日 撮影

被災地の兄妹。震災後、妹は川べりを歩くだけで怖がるようになったという

しのやま・きしん

1940年東京都生 まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業。在学中から新進写真家として頭角を現し、第1回APA 賞など数々の賞を受賞。山口百恵や宮沢りえ、ジョン・レノンとオノヨーコなど、その時代を代表する人物を撮り続ける。本誌では、2010年1 月8日号から「現場紀信」の不定期連載を開始

（写真:本誌）